GIARI　第一回フラッグシップ・プロジェクト(FSP)研究会 議事録(案)

日時	2010 年 5 月 29 日(土)　13:00-17:00
会場	早稲田大学 19 号館 710 教室
司会	松岡俊二(アジア太平洋研究科)

出席者：
事業推進担当者：天児、浦田、松岡、黒田、篠原、寺田、勝間、横田
助教：勝間田、金、平川、本多、堀内　シニアフェロー：杉村、島崎、三牧
ＲＡ：河路　　事務：釣谷、丸山

拠点リーダー挨拶　（文責：河路）

GIARI 研究成果の一環となる書籍出版計画について、前回の研究大会での議論を基に、本日は第一回目のフラッグシップ・プロジェクト研究会を行う。研究担当教授・松岡のリーダーシップの下に、若手研究者である助教 3 名をコアとしてこの共同プロジェクトを推進していくことに意義がある。本日とあと２回の研究会においてこのプロジェクトの土台をつくり、７月頃にとりまとめて出版へと運んでいきたい。７月末までにはこの研究会でまとめられた 3 巻本に 5 巻本も併せて、企画書を作成する。若手が推進力となって頑張ってもらいたい。

FSP1「アジア地域統合への理論的アプローチ」　（文責:勝間田）

（勝間田報告）
　試案１「アジア地域統合への多角的アプローチ」によると、ＦＳＰ第一巻の狙いは、アジア地域統合をめぐる重要な論点を、専門的な見地から追究することにある。この本では、共通の理論やキーワード、分析枠組みなどは一切なしに、各章が自由に構成される。自由な構成により、各章の議論の質が向上するのである。
　試案Ａによると、ＦＳＰ第一巻は、「制度」「アイデンティティ」といった社会科学のキーワードに、様々な視点からアプローチする本になる。試案Ａ「例１」のテーマは、「アジア地域統合と制度――学際的アプローチ」である。これに則るなら、第一巻の目的は、「制度」という観点からアジア地域統合の現状を捉えることとなる。制度とは、様々な学問領域において用いられる概念である。第一巻は、この概念を中心に、学際的な研究をめざすのである。各章で追究する論点は、二つにまとめられる。

（当該の学問領域においては）何をもって「制度」というのか
アジアでは、それが、どのように展開しているのか

何が、決定要因として働いているのか
アジアの制度は、どのような役割を担っているのか
アジアの制度の限界は何か
現状を改善するために、何が求められるのか

試案Ｂ「アジア統合への道のり――理論と政策」によると、ＦＳＰ第一巻は、政策提言を最終目標に掲げ、理論的な議論を展開する。政策提言という最終目標のために、第一巻の各章は、アジア統合を捉える特定のキーワードを中心に議論を展開する（例、「東アジアの奇跡」「中華秩序」「ＡＳＥＡＮ安全保障共同体」「生産ネットワーク・パワー」など）。それぞれのキーワード・理論は、どの程度、今日のアジアの現状を捉えられるのか。何か限界はあるのか。また、改善の余地はあるのか。各章は、これらの点の検討を通じて、統合論の新しい展開の可能性をさぐる。

試案Ｃ「グローバル社会と東アジア地域主義」によると、ＦＳＰ第一巻は、特定の分析枠組みに則り編著を構成する。分析枠組みの具体例としては、地域主義の発展を促している、域内要因（アジア内部の要因）と域外要因（グローバル社会の要因）の役割を探るアプローチが考えられる。このようなアプローチは、グローバル社会との関係の中で進む、アジア地域協力の実態を明らかにするのに有用であろう。

（天児）政策提言については、各章の提言がバラバラになってしまうようであれば、整合性のない本となる。あまり練り込まなくてよいのではないか。なお、試案Ｃについては、金さんの提案の中に組み込めるのではないか。

（黒田）「制度」とは何なのか、「理論」とは何なのかといった点を、まずは明確にしておく必要がある。

（天児）サステイナビリティといったＧＩＡＲＩのキーワードも、政策提言に絡んでくる。

（全員）「制度」「ネットワーク」「サステイナビリティ」「アイデンティティ」といった概念により、政策をグループに分けるのが有効。

（篠原）「政府」「市民社会」など、提言の相手によって政策をグループに分けるのも一案といえる。

（浦田）「政策」というのは、もしも議論するなら、別に一冊つくるべき。三巻の中で、一巻だけが政策を論じるというのはおかしい。

FSP 2「グローバリゼーションとアジア地域統合」　（文責：金ゼンマ）

（報告）

・4 月の全体会議で FSP2 の大まかな方向性については了承を得られたので、今回の報告では三つの構成（総論・理論編・実証編）のうち、実証編に焦点を当て、中身についての具体的な提案を行う。グローバリゼーションの三つの側面（政治、経済、社会）がアジアに及ぼしている影響に注目し、個々のイシュー領域においてアジアで実際に見られる（または考えうる）ファクトファインディグスに焦点を当てる。

・理論的枠組みについては勝間田さんの議案 C と重なる点が多いので、調整する。

（コメント）

（天児）実証編を「政治・経済・社会」に分けるのでよいのか。経済・政治・社会統合と分けてきれいに整理されているように感じるが、極めて複雑化しているので、きれいに分けられるかどうか疑問がある。学際的であることを念頭に入れたほうがいい。

（天児）グローバル化のなかで、ネットワーク・サステイナビリティがどのように地域統合と関連しあうのか。たとえば、ネットワークがいろいろなレベル（教育、安保・・・）で構築されている。 そのネットワークを見ていく。アイデンティティであれば、園田、栗田の成果を使って議論できる。

（松岡）GIARI モデルのネットワーク、サステナビリティ、アイデンティティで再整理し、グローバル化の中でそれぞれを実証する。それにより学際的なイメージが出る（政治・経済・社会の間の連動を見ることが必要になる）。

（黒田）3 冊を理論・実証・歴史という分け方をしたはずだが、グローバル化の関係で理論も実証も同じ巻の中に入っているので他の巻との整合性を考えた方が良い。

（篠原）一巻との連携を考慮する。

（天児）この巻の特徴を出すということ。理論のところを全く入れないという訳ではないが、ある程度制限するのは必要かも知れない。

（黒田）ある程度の仮説があってそれを実証するような感じで、そこを明らかにすると良いのでは。

（黒田）実証編で各章の担当者の名前を入れて提案するのは避けて頂きたい。

（天児）実証編の組み立て方を考えたほうがいい。例えば、ガバナンスの問題。ガバナンスを理論編でやるのか、実証編で扱うのか考えたうえで整理した方がいい。ある分野で

はガバナンスが出てきて、ある部分ではないなど、本全体としてのムラが出ている。「ガバナンス」の扱いについて再考したほうが良い。安全保障の面においては、伝統的安全保障＝人災等の緊急人道的保障だったが、現代における安全保障＝それだけではない。共同体として考える必要性がある。整理の仕方をもう一度組み替えた方がいい。

（浦田）経済面においては、グローバリゼーションという視点が少ない。グローバルインバランスの問題など。世界のグローバルのなかでアジアの位置はどうなのか？アジアの特徴は？常に外を意識してアジアの特徴をつかむ形で書く、というのを意識するとよい。

（黒田）理論編・実証編と言葉を分けるのを検討した方がよい。各分野によって「実証」ということの言葉の使い方、理解が異なる。

（勝間田）理論を検討するのが実証なので、理論（ＦＳＰ１）と実証（ＦＳＰ２）で２巻を分けるのは果たして意味があるのか。

（松岡）何を実証するのかについて。データで実証していくという部分もあり、また組織・制度形成など、統合の事実を確認していく部分もある。ただ、グローバル化の中でアジア地域統合がどうなっているのか、ファクトファンディングをするのは非常に重要である。そういった意味でのファクトファインディングスを重視して、グローバル化ということに焦点を置いて、アジア統合の現実、実態を見ていくという整理は十分あり得る。

（天児）アジア地域統合の「現実」？「実践」？

（黒田）「実証」という言葉を使わず、「キーワード」としての「グローバリゼーションとアジア地域統合」であれば全然問題はない。グローバリゼーションによって、どのようなことが広がり、どのようなことが起こっているのか、それによってどのような制度や取り組みがあるのかを明らかにすると良いのでは。グローバリゼーションの中でのアジア地域統合。あまり「実証」という言葉にこだわらない方が良い。

（本多）きちんと政治・経済・社会領域でコンセンサスをとってからでないと、議論の進め方が難しいのではないか。

（篠原）個々の重要なイシューをどこまで入れられるのかを再考すべきでは。

（横田）編著なので、やはり大枠があった方がまとめやすいのでは。１頁の概要部分に記載されている「グローバル化（あるいはグローバリズム）とアジアの地域統合（あるいは

リージョナリズム）とのダイナミックな相互関係を解明することにより、アジア地域統合研究の新たな地平を開拓する」というテーマで、各分野の先生方に新たなアスペクトを書いてもらうのは意味がある。全体を経済、政治、社会で分けるのは問題ないし、そうならざるを得ないと思う。ひとつの同じ方向性に向かって新たな分析枠組みを打ち出せれば、本として面白い。

FSP3　「アジア統合史（仮）」　（文責：平川）

（討論部分のみ）

（寺田）歴史議論の戦前・戦後の連続性については、自分は「断絶派」の方である。今日の提案では、地域化と地域主義がキーワードになっていたが、全体を貫く視座には至ってない。ここで取り上げた歴史や思想が今日の地域統合につながっているとは思えない。

（平川）中世海洋ネットワークや中華秩序は、現在の Katzenstein や Kang の議論につながるように見えるし、互市のシステムなどは今日の地域統合の政経分離現象ととても似ている。アジアでは経済から政治へのスピルオーバーが起きないことについての歴史的経路からの説明になるかもしれない。

（天児）歴史を取り上げる意義は大変大きい。今日の地域統合で鍵を握る中国自らが中華秩序論や新儒教主義などを考え始めており、これから必ず重要な研究分野になる。また、東亜共同体論を読み返すと、米国との関係、ナショナリズムの扱い方など今日と同じ問題を考え、帝国ではなく「協働体」を目指していた。地域主義の過去を今こそ改めて取り上げる必要がある。

（寺田）序説・総説部分はしっかりとアジアとの関連付けを示してほしい。また、FSP１と２との整合性とは何か？　補完性ではないのか？

（平川）他の 2 冊がグローバリゼーションとの関連を論じる傾向が強いのに比べて、歴史編ではアジア地域の内発性が重視される。矛盾のないようにしたいと思った。

（篠原）全体では「統合史」ではなく「統合論史」になるのか？

（平川）思想、地域化（デファクト）、地域主義を包括的に捉える枠組みを考えようとしているが、いっそ「アジア地域主義思想史」に絞ると一番すっきりするかもしれない。

（寺田）発表では戦後の部分が少なかった。戦後から 1966 年くらいまでは、地域化も地域主義も断絶している時期を説明できるのか？　自分は、中国の存在がこの時期に低下したからではないかと思っている。また、それ以降の時期は、APEC につながる小島清の思想など他にも入れるべき要素がたくさんある。

（浦田）近世にはアジア地域の経済依存は今よりも高かったと見られている。それは、中国ファクターがあったからである。そういう点を見て行けば面白い。

（寺田）今日の地域統合へのインプリケーションを打ち出した上で、全体像を構築するべきである。そうでなければ、見習いたくないサンプルとして出した本（叙述的な通史）と

結局同じになってしまう。

（黒田）インプリケーションは何かと問われるが、そこまでは必要ないのではないか。具体的な歴史的事実を記述するだけでも学術的研究として十分な意義があると考える。

「総合討論」

（文責：堀内、本多）

（松岡）勝間田さんの報告に対しては、基本的には「試案 A」を採用するという議論になった。つまり、社会科学の大きなキーワードである「制度」、あるいは、さらに GIARI の「アイデンティティ」「サスティナビリティ」「ネットワーク」といった共通のキーワードに対して様々な立場からアプローチし、イシューの整理をしていく。あるいはそこから何が出てくるかという議論を加味したらどうか、ということだった。

金さんの報告に関しては、実証編というよりは、アジア地域統合を研究する上での大きなファクターであるグローバル化を、地域化・地域統合との関係で整理をしていくということ。また場合によっては、勝間田の試案 C を参考にして、アジア地域統合研究のモデルのようなものを整理の一つの枠組みとして活用する。そして、「政治」「経済」「社会」という形ではなく、「アイデンティティ」「ネットワーク」「サステナビリティ」という形でグローバル化とアジア地域統合がどう進んでいるのかを見ていく、という議論をした。

平川さんに関しては、アジア地域統合史ということで、地域主義、地域化の整理を行い、第 1 巻、第 2 巻との関係で、歴史的な流れの確認をしていくということであった。

7 月の終わりには企画書を作り、関連したものを含めて 8 巻本程度にしていくことになる。

（天児）これからの作業として、なるべく重複しないようにして各巻の具体的な執筆者を割り当てた形で、企画として出してもらいたい。勝間田さんに関しては、試案 A の「制度」でいくのがすっきりするので、そういう形で絞っていった方がよいのではないか。そこに、我々が議論しているような「アイデンティティ」その他を取り込んだ形でつくっていけるとよいと思う。

（勝間田）もし「制度」で行くなら、二つのリサーチクエスションを挙げるので、どちらで行くのか議論してもらいたい。

１．各専門領域において、制度論とは何なのか。何をもって「制度」と言っており、そこにおける制度論の最先端の展開は何か、それをアジアに適用すると何が言えるのか。これは制度論という面での理論的研究である。

２．理論にこだわらずに、制度という言葉を一つのキーワードにして、アジアでは制度という意味の国際協力はどれだけ進んでいるのか、その特徴は何なのか、その特徴を作っている要因は何なのか、アジアの制度という協力体制はどのような役割を担っているのか、といったことを明らかにする。

（浦田）経済でいえば、FTA が積み重なって経済共同体ができるかどうかといった話が、制度に関する議論だと考えている。理論的なフロンティアでいえば、FTA を形成する要因は何か、どういう国が結ぶのか、FTA が結ばれ、そのような制度ができたことが、経済的にどのような影響が与えるのか。あるいは、ヨーロッパなどに対するアジアのでの FTA の形成のされ方の特徴として、二国間、あるいは ASEAN を中心とした ASEAN＋１という形で FTA が結ばれているという特徴がある、といった議論。こうしたことについて書けと言われれば書ける。

（勝間田）先生のご自分の論文に限らず、この巻全体の執筆者が１と２のどちらのリサーチクェスションを掲げて執筆すればより良い本になると考えるか、教えていただきたい。

（天児）どちらとは言いきれないが、ウェイトは２に置き、それとともに、理論的な面で、アジアにおいて制度とは何かという議論をすればよいのではないか。

（勝間田）つまり、社会科学における制度論の新展開ということではなく、制度というキーワードでアジアの現状をもっと新しい視点からとらえてみようという方向でよいか。

（寺田）制度という定義が、おそらく政治学、経済学、社会・文化論でそれぞれ違うと思う。これだけバックグラウンドが違う人たちがいるので、それぞれが、制度とはこのように定義するとした上で、それぞれのディシプリンからアプローチするということになるのではないか。自分が今、本で書いているのは、制度を「組織」ととらえた場合、アジアの場合は制度と統合というのが実は分離していた、それがようやく今の段階になって結合する方向性に進んでいるのではないか、それを推し進めているのは何なのか、といった問題を見ている。そこからすると、１も２も同じようにものに思える。それらの違いをむしろ聞きたい。

（勝間田）「試案 A」の「例 1」により近いのか、それとも「試案１」の方に近いのか。要するに、理論的な新展開を目指すのか、それともアジアの理解を深めることに重点を置くのかという違いだ。

（天児）あなたが「試案 B」の方でピックアップしているキーワードも、扱っていくと面白

いと思う。

（浦田）理論という場合に、「アジアの」理論ということなのか。例えばFTAの問題にしても、アジアとは全く関係なしに議論している人もいる。

（勝間田）「制度論」の理論的新展開を目指すのか、アジアの展開を新たな視点で見るのか、ということ。

（勝間）例えば浦田先生なら、アジアの中で FTA の制度化が進むことによって、地域統合につなががるのかという議論になる。自分は今、国際人権レジーム論を書いていているが、規範とルールの制度化、つまり、人権の国際監視のメカニズムなどがいかにつくられていくかといったことを見ている。制度を見るといっても、それぞれのディシプリンと関心事項によって違う。ある程度ミニマムな何らかの見解を作っておいて、それぞれの立場から、アジアにおける制度化がいかに地域統合に結び付いていくのかを見ていくという形になるのではないか。

（勝間田）もし理論的新展開をやらず、新しい視点からアジアの現状の分析をするということであれば、必ずしも「制度」という言葉にこだわる必要はないのではないか。

（松岡）各章が重視するキーワードのようなものはやはり共通で持ち、研究会の中で議論しながら問題を整理をしていく中で、制度に関する理論についても議論を行い、共通了解にできるものは共通了解にしていけばよいのではないか。我々は制度と規範は近いと考えているが、それを分けるような考え方があってよい。そこでアイデンティティの議論も出てくるかもしれない。とりあえず「アジア地域統合と制度」という大きなテーマで、つまり、ここにある試案Ａの「例１」の「２」の方でアジア地域統合を議論していくが、当然その際に「１」の方の議論もやっていくということになるのではないか。

（勝間田）キーワードを「制度」にするということについては、他の皆さんもそれでよいのか。それとも「サスティナビリティ」や「アイデンティティ」といったものも入れていくべきなのか。

（松岡）とりあえずはキーワードとして一つ、「制度」というものを立てる。さらに「アイデンティティ」なども入れて複数のキーワードにいくかどうかという問題は、今後に残していけばよいと思う。

（天児）：金さんのところでアイデンティティを入れたらよいのではないか。全体像が見え

ない。アジア地域統合を語る時に、ベースになるものがないと生産的にならない。

（松岡）勝間田さんは、「試案Ａ」の「例１の２」を中心にしながら検討していったらよいのではないか。

（勝間）ここで注目するのは、国際制度という意味ですよね？国内制度は入らないのか？

（天児）地域統合という文脈では国内制度は入らないのではないか？

（松岡）国内で ratify しなければ国際制度を履行できないので、当然国内制度は入る。どういう整理ができるのかこれから検討していく。

（勝間）地域統合という時に、どこまで見るのかコンセンサスが必要だ。制度といったときに、どこをベースに書くのか共通項がないと難しい。

（勝間田）では、「試案Ａ」の「例１の２」について各先生方に書いていただくという方向性でよいのか示して頂きたい。

（天児）そうきっちり考えないでも、キーワード（pp. 4-5）も入れ込んで考えてほしい。

（勝間田）大事な部分をクリアにしてほしい。

（松岡）突き詰めずにこれから検討していくのでよいのではないか。

（勝間田）理論というテーマは排除してよいのか？因果関係のセットを排除してよいのか？

（松岡）当然何かを書こうと思えば、理論的なインプリケーションも書くわけだから、理論は入るでしょ。

（勝間田）新しい理論を作るわけではないということですよね？

（松岡）新しい理論を作るのをやめたというわけではない。

（勝間田）例えば「蝋燭モデル」を掲げて書くというわけではないのか。

（天児）そうではない。各々が掲げているモデルを擦り合わせていって何か新しいものが書けるといいな、というイメージである。今後どこに手を入れて修正していくかを議論していく。

（勝間）今は「本」ありきということで議論しているのでおかしくなる。結果として、新しいものが生まれてくるかどうかという話である。

（勝間）ゆるいものでよいので、共通の分析枠組みがあればよい。

（松岡）本日の議論を含めながら進めていく方向で良いと思う。ひとり数章を書くということになるかもしれないが、できるだけバランスを取って、７月を目途に進めていく。

第 2 回　6 月 15 日（火）17-20 時
第 3 回　7 月 20 日（火）17-20 時
　→第 3 回目で最終的な企画書を作成し、編集体制・執筆者を決定する。
アジア地域統合研究シリーズ 8 巻本は 7 月末までにまとめていく。